



Title	国語問答 ホアン・デ・バルデス(翻訳-6)
Author(s)	Valdés, Juan de; 中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 1983, 62, p. 95-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80954
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国語問答 ホアン・デ・バルデス（翻訳—6）

中 岡 省 治

これまで5回（大阪外国語大学学報第30号、36号、38号、40号；Estudios Hispánicos 第7号）に Juan de Valdés 著、*Diálogo de la lengua* の翻訳をおこなってきたが、以下はその続きである。

この翻訳には、Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, edición y notas de José F. Montesinos, Clásicos Castellanos, No. 86 (Madrid, 1953) を底本として用い、その他、Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Ebro, No. 18 (Selección, estudio y notas por Rafael Lapesa, Zaragoza, 1965), Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Castalia, No. 11 (Edición, introducción y notas de Juan M. Lope Blanch, Madrid, 1969), J. de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Biblioteca Clásica Universal, No. 12 (Prólogo y notas de Felix F. Corso, Buenos Aires, 1940) を適時参考とした。

この言語問答には Valdés と他の三人、Marcio, Coriolano, Pacheco とが参加するが、これら問答者は訳文では夫々の頭文字で示している。なお、以下の訳出部分は上記テキストの129ページ17行目から、157ページ15行目までに該当する。

A continuación aparece una traducción parcial del *Diálogo de la lengua* compilado por Juan de Valdés en 1535 en Nápoles y publicado por el egregio lingüista Mayáns y Siscar por primera vez en España en 1777.

Parte de la obra también traducida que precede a la presente fue publicada en el Journal of Osaka University of Foreign Studies, ediciones 1972, 1975, 1979 y 1980, y la revista Estudios Hispánicos, edición 1980.

V. これに類するような歌を私は昔は沢山覚えていたのですが今はすっかり忘れてしまっています。でもこんな風に私の記憶に残っていたものがあると知って私も驚いているのですよ。さて、tocar は tangere（触れる）や、pertinere（に関係する）と同じことですが、“頭を飾る” ことをも意味します。これは toca（頭布）から出た意味ではないかなと私思うのですが、“Cabeça loca, no sofre toca”^(注1) とか “La moça loca por la lista compra la toca”^(注2) という諺の中に表われています。次いではある僧侶がこの三語を、本当に上手に、これまで挙げた夫々の意味をもたせて使った場合を皆さんにみてもらいましょう。あるとき一修道女が彼に toca（頭布）をひとついただきたいと願い出たので、彼は答えて、“Quando toque a mí tocaros, con más que esso os serviré（あなたに頭布をかぶせるのが私の役目となったときには、それ以上のことをしてあなたにご奉仕いたしましょう）”^(注3) と言ったということです。

P. うあー、何んと恥知らず、いやらしい坊さんなんでしょうね。げすの塊、納所坊主のなかでも悪の悪だ！

V. あなた僧侶のことが話題となるとそのとたんに、えらく腹を立ていきり立つのですね。まるであの人たち我々と同じ人ではないような扱いじゃないですか。

P. まあ、まあそうはおっしゃいますな、もうこれ以上そのことについてはとやかく言わないでおきましょう。あなた様には僧侶たちを弁護なさいませ、私は本日以降もなお熱心に神聖ローマ帝国皇帝に対抗するフランス国王の大義を擁護いたす所存ですからね。^(注4)

V. Cuerda は prudente（思慮深い）の意味を表わし、またラテン人が funis（綱）と使っている意味をも表わします。ここのこの二義性を巧みに利用して Antonio de Velasco 氏^(註5) が球打ち遊びについて書き残したものがあのですよ。この球技は皆さんも知っているように、綱(cuerda)をはってその上を球が通るように打ち合うものでして、これは皆が球打ち遊びをしに行く家の主人の娘、つまりその家の姫御に召使として侍っていた Diego de Bovadilla 氏をあてこすって作った歌の中に出てくるのです。こうなっています。

Don Diego de Bovadilla
no se spante, aunque pierda ;
siendo su amiga la cuerda,
ganar fuera maravilla.
El sabe tan bien servilla
y sacar tan mal de dentro,
que stá seguro Sarmiento.
(ディエゴ・デ・ボバディリア殿は
勝負に負けるとも、驚ろかれるな。
彼の恋人、綱の姫君なれど、
勝ちをとること稀有とならん。
彼その姫に仕え侍ることに誠を示し、
不快をも甘受すること弁えおれば、
姫君の父君サルミエントの勝確かなり。)

M. ああ、次々と隠喩を使ったその手法、何とすばらしいことでしょう。私はそれ以上の出来ばえのものこれまでに見たことがありませんよ。

V. Lonja という単語をイスパニア語では、“散策するための場所”をいうために使ったり、また lonja de tocino（一切れの豚の脂身）という使い方もします。

M. ここで豚の脂身が話に出たことをみますと、次にくる一口話もきっと面白いものなのでしょうね。

V. あるとき、とあるご婦人の住む家の前を一人の青年が散歩していたところ、この女性に熱を上げていて、これでいつもその家の前を行ったり来たりしている騎士に出会ったのです。さて、この騎士その青年を見て、「お若いお方、私に lonja（場所）をお譲り下さらないか」と言ったら、その青年大宮人のようなもったいぶった様子をして、「なんと lonja をと言われるか。私めには lonja de tocino（豚の脂身）のことではないとは分かりおるが」と答えたのです。このことばに騎士は直ちに反撃し、「もし豚の脂身というのなら、それは貴殿の方が似つかわしかろうと存ずるものを」と言ったということなのです。

M. そうなるともう明らさまなかけ言葉のけんかとなってしまいますね。

V. “信用に値する人”を指して *fiel* といいます、これ以外にはさみで物を切るときに両刃をくみ合わせてうまく利くように留めるための“目釘”も *fiel* というのです。さてと、あるとき、主人がその家の下男の一人に、手紙を開封するのに使っていたはさみの目釘が落ちてしまったので、それを打ち込んでおくよう言い付けたところ、すぐさま下男が答えて、「旦那さま、村中捜してもあなたの財産の管理を任せられるような信用のある者 (*fiel*) を見付けられないとおっしゃっているのに、この私めにあなた様のはさみに合う信用釘 (*fiel*) を見付けよと申されても、それは無理でございます」と言ったというのです。

M. この話しの方が軽くていいように思えますね。

V. みなさん方は単語夫々が暗に意味するところだけを注意してみればいいのですよ。私はもっと酒落て、出来のいいものを他に沢山お話しも出来るのですが、暗に何をいわんとするのかを知ってもらうため、これまでの話をしたのですから。

M. 私たちもそうにお話を承っておりますよ。

V. 当地で皆さん方が *tossico* (毒)と呼んでいるものと、家畜が餌に食べる“牧草類”とを、私たちはカスティリアで *yervas* と呼んでいます。そこで、“*Yerba pace quien lo paga*”^(註6) という訳です、またこの *yerba* から *ervaje* や *ervajar* が出来たのです。こんな話があります。ある実直な郷士がその在所に何がしかの草地、つまり牧草地を借り受けたのですが、借地代を払えなくなってしまうと、その在所を出奔したのです。その逃避行の途中でメディナ・デル・カンポの市から家に帰るところの隣人にばったり出会ってしまったので、この郷士は、その在所に帰ったら自分は死んだと言い触らしてくれるようにと、また何で死んだのかと尋ねられたなら、牧草地の毒 (*yervas*) を食んでと言ってくれるようにと頼んだのでした^(註7)。こんな話もありますよ。他にもないこの郷士が、ある日のこと明け方もまだ早く、イスパニアの習慣にしたがって教会での終夜の勤行 (*velar*) を終えてきたときに、とっても間抜けのいここがいて彼女がその僧侶に、朝課を終夜勤めて (*velar la prima*) て帰るのかそれとも明けの課を終夜勤め (*velar la modorra*) て帰るのかと尋ねているに出くわしたというのですが、ここでもまったく意味の曖昧な三語を使って話のおかしさを出している訳です。^(註8)

M. 私はその三語の意味全部がとてもよく分かりますし、また彼女はそれを実に巧みにしかも酒落た風に使ったものだとも思えますね。

V. あなた方がラテン語で *vibex* (打ち創)と呼ぶものを私たちはイスパニアでは *cardenal* (あざ) といいます、これは打ち創などが紫色になるからだと思えるのです。また法王が任命される高僧をも *cardenales* と呼んでいます。ここではローマ法王レオン3世が31人の枢機卿を任命されたとき、これに不満の一僧侶がその説教の中でローマ教会のことに触れて、ローマ教会は夫が自分を虐待していると神に苦情を申し立てていると公言し、ローマ教会の口を借りて、「ああ主よ、あなたは私の言を信じたくないと思われるかもしれませんが、私の身にこのたび夫が作り出

しましたるこの枢機卿 (cardenales) の姿をごらん下されば事の次第が明らかになりましょう」とも言ったのです。

M. そのような一口話はいつもピリッとした味が利いているので面白さもかく別ですね。

V. Falta (失敗・不足) という単語は、皆さんも知っているように、球打ち遊びにもまた、“Malo es Pasqual, mas nunca le falta mal”^(註9) のような場合にも使えるのです。この二種の意味を暗にひっかけて例の Antonio de Velasco 氏が、その球打ち場にいたあまり教養のない騎士に対し、前と同様彼をからかうために作った歌があるのです。こうなっていましたね。

El de la cuerda, a mi ver,
allí no ganará nada;
si no es falto de tomada,
será falta de saber;
tantas le vemos hazer,
y de ver que son sin cuento,
no vaya a cas de Sarmiento.

(綱の殿御は、私の見るところ、
そこで何の勝をも収められまい。
もしその負けが攻めの不手際のせいでなかりせば、
熟練度の不足ならん。

我ら彼の下手さ加減をいくたびも見、
彼その不手際を露呈せること数限りなきを知れば
サルミエントの家には行かれぬよう願いたし)

M. Antonio de Velasco 氏の機知が生んだその歌、仲々の出来ばえですね。

V. Cogitare (考える) の意味で私たちは pensar を使いますが、“動物を手なづける”という意味でも pensar といいます。これが、あの有名な、ビスカヤの人の愚かしい行為を生む原因となったのですが、このビスカヤの人とは、ある郷士に仕えていて、馬にまぐさをやる役目を与えられていたので、かねがね鞍を置く仕事はしないぞと言っていたのですが、なぜそんなことを言うのかと尋ねられて、“Uno piensa el bayo y otro el que lo ensilla”^(註10) という諺を聞いたことがあるからなのだと答えたということなのです。

M. ビスカヤの人らしい知恵ですね。

V. 語義の曖昧な語を次々とめぐる、このような類の冗談話をあなた方にしていなくてもきりがないので、これはもう打ち切りにして次にゆき、pecho は pectus と同じで、郷士でない人たちが国王に支払う一定の貢納金のことで、ここからその人たちを pechero と呼ぶことになったということを申しておきます。corredor とは“走る人”ですが、当地であなた方が loja (取引所?) とか、また sensale (仲買人) とかいつているのに当ります。moço と moça とは“召使”を意味する

名詞で、また年齢を表わす名詞にもなりますが、これから私たちは *mocedad* とか *mocedades* を造っています。これが“下僕”を意味する名詞だということは次の諺でもはっきりしています。“Guárdate de mujer latina y de moça adivina”^(註11)，“A escudero pobre moço adivino”^(註12)，“Al moço malo, ponadle la mesa y embiadlo a mandado”^(註13) というような場合です。また、この *moço*, *moça* が年齢を示す名詞となることは次の諺、つまり“Moça, guárdate del moço quando le salle el boço.”^(註14) ではっきり分かるはずです。*cuento* もまた語義が曖昧ですが、例えば *cuento de lanca* (槍の石突き)、*cuento de maravedís* (百万マラベディ) といったり、小説の意味で *cuento* (短篇小説) といったりするからです。*tacha* (欠点) はカスティリア語でもイタリア語でも同じ意味ですが、革張りの長持ちに打つ“鋸”をも私たちは *tacha* といっています。

M. 私にはそんな風に次々と単語を挙げてこられるのはどうも気に入りませんね。むしろ最初あなた様が始められたときのような形で話を進めていただくようお願いしたいのですが。

V. お願いですからそうは言わずにこちらの思うようにさせて下さいよ。こんど、日を改めてあなた方にいろいろ冗談話を聞いてもらって、ああもうんざりしたと言わせてみせますからね。私たちは *hacha* という単語で、別の言い方では *antorcha* (松明) となるものをも表わしますが、他に *segur* (まさかり) をも *hacha* と言っています。*servidor* は、私たちが今話題としている三言語に共通の、それ本来の意味の他に、下賤な意味をも持っているのですよ。

M. その意味をはっきりとおっしゃることはありません、私には分かっておりますので^(註15)。

V. *Mancebo* という語から *manceba* をも造り出していますが、これは若い女性と同時にまた“妾”をも意味します。また他の意味と類似性があるというだけで多義性が発生するような単語もありますが、例えば *capón* (去勢した獣・鶏) の場合、意味の類似性から私たちはこの単語に *eunuco* (宦官) の意味をも与えているのです。これについてはある貴婦人にまつわる冗談話があって、それによると、彼女は未亡人としての生活を送った後再婚したのですが、その夫となった人が男性としての役目を果せなかったので、彼を追っ払うため、イタリアに行ってきたらどうと言って500ドゥカドを彼に与えたのです。話というのは、この女性がある夜、宴会に出たときに、皆がそこに出ていた何羽かの若鶏 (*capón*) の立派さをほめて、その内の一人に至っては、これは高価なんだぞ、一羽1ドゥカドもするんだからな、とまでもいうのを聞いて、彼女、「あなたそんなものぐらいを高価だとおっしゃるのですか、私は一羽に500ドゥカドも出したのですが、私には何のいいこともなくってよ」と言ったというのです。

V. そのお話もう終りにして下さいませんか、お願いいたします。もっと他のことをお話しいただくために時間をとりたいと思いますので。

V. あなたが私の話の鼻を折ってくれたことを有難く思いますよ。さて、まだこれ以上皆さんに質問があるのですかな。

M. では多義語とやらはもうそこまでしておいていただけませんか、といいますのは、今思

い出したのですが、あなた様はカスティリア語の中にいくつかの単語を取り入れたいと思うと、かねがねお話しになっておられましたので、話を前に進めるまえに、それがどんな単語なのかお聞かせいただきたいのです。

V. 私の思いつくものの全部を喜んでお話ししましょう。ギリシア語からは、未だその使用面では不安定ですが, paradoxa, tiranizar, idiota, ortografía などを取り入れたいと思いますね。

P. ですがあなた様が私たちにそれらの新語を受け入れさせようとして、私たちに是が非でもそれらの単語を覚えるよう努めなどと申されるのであれば、ギリシア語もラテン語も知らない我々としては、何ともはや困ったことになってくるのですが。

V. いや、いや安心して下さい。私がそういう単語を使うのを皆さん方が認めてくれれば結構なのです。といっても、もし、少しばかり気を付けておれば、易々とそんな単語の意味も分かることですね。

P. Tiranizar と ortografía の意味は十分よく分かりますが、他のものの意味はまったく見当もつきませんね。

V. そうならその意味をあなた方にいっておきますので、今後は知らないとはいえませんが。paradoxa とは“考えてもいないのに思い浮んできたこと”，idiotia は“知恵がなく、学問のない人”を意味するのです。夫々の意味ははっきりしましたか。

P. ええ、よく分かりました。次に話をお進め下さい。

V. 私はラテン語から次のような単語、つまり ambición, ecepción, dócil, superstición, obieto を取り入れたらいいなと考えています。これらの単語を Celestina の作者が“la vista a quien obieto no se pone”（実際のものが目に入らないような視線）^(註16) といっていますが、私に言わせれば、この obieto は実に当を得た使い方として、何故かという、その内容を表現するためには、それに当てる適当なカスティリア語の単語が見当らなかったからなのです。すると、そのことをいうのを断念するかどうかということになりますが、こうするよりは、このラテン語の単語を使っていった方が結果としてはよかった訳で、ラテン語の単語を使わずにいうとしたら、ずいぶん回りくどい言い方をしなければいけないのです。私は出来れば decoro も取り入れたいですね。

P. Decoro とはどういう意味なのですか。

V. 人が生き方のうえでその身分と地位にしたがって、己を律しているときに、私たちは、その人が guardar el decoro（品格を保っている）というのです。この単語は本来は芝居の役者たちについていうものでして、かつては、芝居の中で演ずべき役どころを逸脱せずに守る役者たちのことを、guardar bien el decoro（正しくその役柄を演じる）といったのでした。

P. よく分かりました。お話、お進め下さい。

V. Paréntesis, insolencia, jubilar, temeridad, profesión をも取り入れたいですね。

P. 何とおっしゃいましたか、profesión はカスティリア語ではないのですか。

V. ええ、勿論カスティリア語ですとも、しかしこれまでは、お坊さんたちが威張ってその単語を一人じめして使ってきたのです。しかし、私はラテン語やトスカナ語がそれを使っているように、カスティリア語でもそれを使えたらいいのと思うのですよ。つまり、“Juan haze profesión de loco (ホアンは気違いのふりをしている)”とか“Pedro haze profesión de sabio (ペドロは賢いことを鼻にかけている)”というような場合のことです。persuadir と persuasión, estilo, observar と observación も取り入れたらいいですね。

P. あとの三語の意味、ご説明いただけませんか。

V. Estilo という語で私たちは、いい場合と悪い場合、荒々しい場合とか厳しい場合などをこめて、物の言い表わし方を指すのです。observar は“気が付く”だけの意味ではなく、その他の多くの場合にも使えます。observación も同じことになります。私はかつて、obnoxius(罰すべき)と abutere (罰に値する)の意味するところをカスティリア語で表現したかったのですが、それが出来ず困った経験があるので、無理をしてでもこの二語を取り入れたらとも思うのですが、一方、この二語はカスティリア語とはまったくかけ離れたものなので、私としてはどうしても使う気になれず弱っているのです。誰かがそれを使ってくれば、私もそれにかこつけて使えますので、そうなれば本当に有難いのですけれども...カスティリア語としてはイタリア語から次の単語を取り入れて使いたいですね。まずは facilitar を、次いでは、あなた方がここで使っているのと同じ意味で fantasía^(注17) を、“Cada cardenal aspira al papado”^(注18) に出てくる場合のように、“狙う”の意味で aspirar を、これに加えて、dinar, entretener, discurrir と discurso, manejar と manejo, diseñar と diseño^(注19)、“創意工夫する(inventar con el ingenio)”の意味での ingeniar, servitud, novela と novelar, cómodo と incómodo と comodidad, solacio^(注20) martelo, これは celos(嫉妬)と同じものには思えませんし、これに加え、pedante と assassinar がありますね。

C. 思っていること正直に言わせていただいて構いませんですか。実は、私あなた様がそんなにも勝手気ままにあなた様のことばの中に単語を増やしてゆかれるのをよしとは出来ないのです。とくに、従来のイスパニア人学者、文人などの行き方にもはっきり出ていることですが、それらの単語なしでもみんな何の痛痒も感じていないのですからなおさらいいこととは思えませんね。また、あなた様に私の申ししていることが正しいということをお認めいただくには、あのキケロがラテン語にごく僅かの単語を付加するに際してもどれほど周到に、慎重控え目にしているかを思い起して下されば十分だと思います。今いうのは、qualitas (性質), fantasía (夢想)の意味をもつ visum, comprehensibile (理解しうる)などで、これらの単語なくしては、キケロは自分が語らんとする主題について自己の思想を十分に表現出来なかったのですから、キケロの処置は正しかったということになります。ついでながら、その主題とっているのは、もし私の記憶が正しければ、キケロが“学術論集”と呼んだ問答集(Questiones)だと思うのです。

V. あなたがいうそれらの周到さ、慎重さをキケロが示したのはそれなりの理由があつてのこ

とで、それは彼がラテン語の中に自分の造り出した単語を取り入れる時のことだったのです。しかし、もしあなたがしっかりと覚えているとすれば、今あなたが挙げたその書物中でギリシア語の単語を使ったり、利用したりするときには、彼は何のことわりもしていないこと、それどころか彼は自由気儘にそれらの単語を使い、それらをギリシア語の字母だけでなく、asotus, idea, atomus のようにラテン語の字母を使って書いていることにも気付くはずですよ。ですからね、私は新しい単語を造るわけではなく、私のことばと何らかのの似通いをもつ他のことばの中に見付けたものを利用したいということなのですから、なぜあなたのお気に障るのか分かりませんが。

M. コリオラノ君、先生の言われていること、まごうことなき真理ですよ。それでは、今度はパチェコさんですが、あなたは、それら後から付け加えられてきた単語についてはどう感じるかを私たちに聞かせてくれませんか。

P. そうですね。それらの単語の全部に対してどうだと尋ねられるとしたら、中には少々こだわりを感じ、何かなじめないといえる単語もありますが、喜んで取り入れるのに賛成しますね。それらの単語で私のことばが啓発、充実されるということを知ってはなおさらそれを可として認めたいですし、またそれを頻繁に用いることで、少しずつそれらの単語を柔らかなじめるものにしてゆけるのですからね。

M. それは真理ですね。この世界にあることばで単語が新たに追加されてくるのがよろしくないとして嫌がるようなものはないはずですからね。しかし、大切なことは、あなた方がこれらの単語を取り入れたいとおっしゃるのは単にことばの飾りのためか、それともことば自体がそれを必要とするからなのか、この点を知りたいですね。

V. どちらの理由もあるのです。

C. すると、あなた方の心に浮んだ思いを言い表わすための単語が不足しているということなら、どうして、そのカスティリア語でこんなにも得意気にいろいろなことをおっしゃるのですか。

V. 我々の心に浮んだ思いを表わすための単語が私たちに不足しているなんていうことはありませんね。というのは、もし私たちに、一語で言い表わせないことがあるとしても、二語三語を用いて説明すれば何とでもなるのですから、別に私たちのことばを使ってえらばり、得意になっているのでもないのですよ。ただし、もし我々がその気になったとしたら、仰山にいろいろ言い立ても出来るのですが、今は私の気持としてはカスティリア語の単語二語だけを挙げられたら満足ですね。その二語に相当するものがあなた方の国語、トスカナ語にはないのでして、そのうちひとつでも私に出そうとあがいても駄目ですよ、その出てきた単語にはそれに呼応するカスティリア語の単語を別に教えてあげますからね。

C. なんともはや、イスパニア人らしい勇ましいこと、まさかそれを聖パウロの使徒書簡の中で習い覚えられたのではないでしょうね。^(注21)

V. 勿論のこと、私はそれを使徒書簡やローマ人への手紙の中で習ったのですよ。それにチャコン門^(注22)がどういう人なのかをあなた方に知ってもらうためにもう少し話をしておきたい

のです。私はチャコン一派と同じことをラテン語に対しおこなう積りなのですからね。

C. そんなに厳しい態度のあなた様を見たのは初めてですね。ではどうぞ、それに呼応するラテン語の単語はないとお考えになっている、イスパニア語の単語をいくつか使って、この私めを弄ばれたらいいですよ。

V. あなたを弄ぶなんてとんでもありません。でも、あなたがいう数の単語では不十分ですので、まあさし当り、二十語程度をあなたにお話ししてみましょう。

C. それらは俗っぽい単語なのでしょうね。

M. いやいや由緒正しきもの、ポルトガル国王の食べ残されたパンくず^(註2.3)からできたものだけなのです。それで本当にそうなのかどうかをはっきりと見きわめるため、ひとつづつ数え上げてみたらどうですか。Aventurar, escaramuçar, escarpiar, madrugar, acuchillar, amagar, grangear, acaudalar, aislar, trasnochar, esquilmo, fulano, axuar, peonada, requiebro, desaguadero, retoçar, maherir, çaherir, trafagar, amanecer, jornada, ospitalero, carcelero, temprano, mesonero, postremeria, desenhadamiento, desmayar, albricias, engolfar, escuderear, amortecer, sazonar, alcahuetar ですが、これで十分でしょうか。

M. いや、沢山におっしゃったものですから、あなた様を厄介なことに引きずり込んだと後悔もしていますし、あなた様がそんなにこの問題に夢中になっておられるのを見ますと、別に音楽がかからずとも踊り出されるような様子ともお見受けするのですよ。でも、私はあなた様の思い違いを正しておきたいですね、というのはあなた様がお国のことばに多大の貢献をしたのだと自負され、天狗になられると困りますからね。私でもその種の単語ならトスカナ語については四十語や五十語は軽く挙げられますよ。

C. 私ならもっと、百二十ぐらいは言えますよ。

V. 私もまた、アラビア語の単語を含めてのことなら千二百ぐらいは言うてのけられますよ。これは guadamecil, almaizar, almirez など、ものの名前の場合ですけれど。しかしこんなことはどうでもいいので、あなた方、どれだけ挙げたらいいのか聞かせてくれませんか、というのも私は約束したことを果したので、もうこれで、こちらとしては十分だと思うのでしてね。

M. いやいやお考えになっているほど完全に約束を果されたとはいえませんが。

V. まだ十分ではないのですって。

M. と申しますのはね、挙げられた単語みなにラテン語の対応形を出してはおられませんからね。

V. では、どの単語にラテン語の対応形があるのか聞かせてくれませんか、私もあなたの話から学ぶことが出来れば嬉しいですからね。

M. いかがお考えですか、ラテン語 lascivire(気ままに振舞う)はカスティリア語の retoçar(飛びはねる)でいう意味をよく表わしていると思われませんか。

V. いやそうは思えないですね。というのは lascivire は相手なしでも出来るのですが retoçar はそうはゆきませんので。

M. なるほどその点はお話しの通りです。ですが、senectus（老年の）と postremería（晩年）とはまったく同じことではありませんか。

V. ちがいますね、というのは senectus は私たちが vejez（老年）でいう意味ですので、postremería というよりもずっと一般的になりますね。

M. そういたしましょう。すると、mesonero（宿の主人）はラテン語の pandochius（宿の主人）の意味するところと同じにはなりませんか。

V. まったく同じことです。しかし、その単語はラテン語ではなくギリシア語であること、ですから、carcelero（獄吏）の意味で desmophylax をもってくるのと同じことになるのに気が付かないですか。私はここではラテン語に本来固有のものとしてある単語だけを問題にしているのですからね。

M. なるほど、ごもっともです。ですが、これまでにあなたが何かラテン語やイタリア語のものをイスパニア語に翻訳された経験をお持ちだとしたら、今まで挙げられたもの以外にも沢山の単語を見掛けられていることと思いますが、このような場合ラテン語やギリシア語で書いてあることをカスティリア語で完全に表わそうとなさるときには、本当にいろいろ困られたことがあったでしょうね。

V. ましてそのうえに、各言語にはそれぞれ独特の単語とそれぞれ独特の言い方があるので、一言語から別の言語へ正しく翻訳する場合にはそれ相当のむづかしさがみられるのです。私はこのむづかしさを翻訳する側の言語の欠陥のせいだというつもりはなく、むしろ翻訳される側の言語の豊饒さからくるものと考えます。したがって、ある言語ではとっとうまく言い表わせることも、別の言語ではあまりうまく言い表わしえないことがあるのですし、またある特定の言語を使うと他のどのことばを使ったときよりもうまく言い表わしうるようなこともあるのですよ。

C. とてもしかりとしたご説明で、正しくそうだといえますね。

V. したがって、あるひとつの言語からもうひとつの言語への翻訳を手掛ける人で、その二言語に精通していない場合、そういった人の無暴さには驚ろくばかりですね。

M. そんな場合には、大したことは翻訳出来ないのではありませんか。

V. そういうことだとすれば、ぜひ必要な言語、つまりラテン語、ギリシア語とヘブライ語を知っている人たちがもっといてもいいということになりましょうね。というのは、これらの三言語では学問に関することと同時に宗教に関することでも貴重な教が普く書いてあるのですからね。

M. さあ、ではこの問題を切り上げて私たちの問題の方に戻りましょう。勿論、これまであなたが提唱されたこと全部を正当なこととして認めたいのですが...

V. これは恐れ入ります。そこでこの皆さん方の寛容さに対する返礼として、単語の話から次に移るまえに、カスティリア語で手紙などをイタリア人に書くとき、私が旨として守り気を付け

ていることを皆さんにお話ししておきましょう。

P. もうそれはお伺いしましたよ。長い i と波形符号のことではありませんか。

V. あなたカンティンパロの鴨^(註24) みたいですね、道に出て狼を待ちうけたとかいう例の鴨のように余計なことを言うのですね。いや、これは失言、言い過ぎました。

P. いやこちらこそ失言、お許し願って、おっしゃっていた注意とかお話し下さい。

V. 言わんとしたのは、私は常にカスティリア語の単語をイタリア語の単語に合わせて、またカスティリア語の言いまわしをイタリア語のそれに合わせて変え、カスティリア語からは逸脱してしまわないでイタリア人にもよく分かってもらえるよう配慮をするということなのです。

P. どのような方法でそれをなさいますか。

V. そうです。単語の場合には、“Honra sin provecho, sortija en el dedo”^(註25) と仮にいわねばならないとしたら、私は sortija に代え anillo というということなのです。また、salario といえるところなら、acostamiento とはいわないでしょうね。

M. acostamiento は salario と同じことですか。

V. ええ、同じことです。

M. その単語これまで聞いたことがありませんが。

V. 聞いたことがないですって、ある騎士がとあるカスティリアの大身の武士に使を送って、自分と一緒に暮していただきたいと願い出、それがかなえられれば高い俸給を進呈いたしましよと申し出たということを題材にした、仲々面白い歌をあなた知りませんか。

M. いいえ、私は聞いたことがありませんので、お教えいただきたいですね。というのも、あなた様がそれをお賞めですし、話自体も結構面白そうに思えますので、歌もよく出来ていること間違いありませんから。

V. その歌はこうなっていました。

Diez marcos tengo de oro
y de plata cien y ochenta
buenas casas en que moro
y un largo cuento de renta,
diez escuderos de cuenta,
de linage bien contento,
de señor no acostamiento,
quês lo que más me contenta.

(拙者は黄金十マルコに、
銀にては百八十マルコ、
今それがしが住む家を保持し、
これに加え莫大なる収入をも有さん。

その素性も正しく、家柄に遜色のなき、
 十名の従者を抱え持っても、彼ら
 その主人からは手当を受けはせず、
 これ拙者いとも気に入るること。)

M. 何ともはや、その正直で、機知に富んだ騎士のことば愉快ですね。とはいえ、必要とするものの全部を持っている騎士が、いくら金があり余っているからといっても、一体何のために自分と一緒に暮してくれるようにという願いをその大身の武士とかにせねばならなかったのか、そのわけをお教え下さいませんか。

V. それはこういう理由です。現在、カスティリアでは大身の武士は国王の直轄下にある大都市の運営に参画することを願って、都などに住んでいる最高位の有力者とされる騎士に仕官し、そこから俸給を受けるのが慣例になっているのでして、片や騎士の側はその子飼いの兵士たちが戦場に赴いたり、何か特別な行事で宮廷に伺候せねばならぬときに付き添いとして同行してもらったり、また自分たちの住んでいる都市に出来る事々に、それら武士の働きを求めるかたわら、それ以外の時にはそれら武士を自分たちの館に住まわせ、手当をも与えているのですが、その扶持を *acostamiento* と呼んでいるのですよ。

M. すると沢山の騎士がそういう武士たちを抱えているのですか。

V. ええ、昔はそうでしたが、今では皇帝陛下の偉大さということもあって、カスティリアでは前ほどではなくなり、その種の権勢を見せびらかすという風潮もすたれてきました。

M. すると昔そこに使っていた金銭を今はどんなものにつぎ込んでいるのでしょうか。

V. どこにそんな金を使っているかですって、人それぞれにお金を使わせるような道楽ごとがあることをあなたは知っているでしょうに。

C. その道楽ごととは何のことを指しておられるのですか。

V. 賭事、衣裳狂い、飲み食い、これが皇帝陛下のイスパニアへの君臨と共に急に激しくなった三悪で、これが国中どこでも広く感じ取れるのは間違いないことですよ。

M. 私たちはその方面のことに関心はありません。どうぞあなた様のお考えの単語についてお話をお続け下さいますように、それがこの会の目的にもかなっておりますし…

V. 結構ですね、しかしこの種の息抜きも時には悪くはないんで、あなた“キャベツとキャベツの間にちしゃをはさめ”^(注26)ということをも知っているでしょう。さて私は *doliente* (病気の) といわねばならないとしたら、*enfermo* を使っていますね。

M. その二語ともカスティリア語ですか。

V. この二語とも次の諺でうまく使っていますね。そのひとつは、“*Con lo que sana el hígado, enferma la bolsa*”^(注27) というもの、もうひとつは“*Con lo que Pedro sana, Sancho adolece*”^(注28) というものです。次に、私は *de cada parte* (それぞれの部分・所から) といわねばならぬとしたら、*de cada canto* を使っていますね。

M. その言い方カスティリア語でしていいのですか。

V. そのように私の集めた諺の中でいってますね。そのひとつに, “De cada canto, tres leguas de mal quebranto”^(註29) となっています。次ですが, fenestra (窓) といっていいのなら, 私は ventana は使いません。conviene としていいところでは cumple とはいいません^(註30)。また, 私は mercar (買う) よりも comprar を使い, carta (手紙) よりも letra の方を使います。rodillas (ひざ) よりも hinojos を使い, cama (ベッド) よりも lecho を使うのです。

C. Lecho はイスパニア語ですか。

V. “La pierna en el lecho y la mano en el pecho”^(註31) という諺に照らし合わせてみて下さいよ。次にいって, 私は mohino (うら悲しい) よりも malencónico の方を手軽に使うでしょうね。

M. 私には mohino と malencónico とが同じものだとは思えません。少なくとも, “Dos a dos y tres al mohino”^(註32) という諺では malencónico と同じ意味を表わしてはおりませんので…

V. いやそうではなくて, もしあなたがそのところ気を付けてみたら, 同じことだと分かりますよ。なるほど, 私たちは mohino を “勝負事でつきがなかったり, このつきの落ちた人 (desgraciado o desdichado en el juego)” の意味に解釈することがあるのは事実でして, ここから誰かが勝負に負けるとその人が estar mohino (つきがない) であるといい, また誰かが何事かをよくないことの前兆と考えふさぎ込むような場合に, その人が “se amohina (機嫌を悪くする)” ということもあります。しかし, こうだからといって, ぴったりとはまるような箇所ならこの mohino に代え malencónico を私が使うのはいけないということにはならないのですよ。

M. おおせの通りです。どうぞ先に話をお進め下さい。

V. 私は lloro (泣く) よりも planto, vela (ろうそく) よりも candela, alhombra (じゅうたん) よりも tapete, quemar (焼く) より abrasar, carátula (仮面) よりも máxcara, pescueço (首) より cuello, sarna (ひぜん) より roña, aína (直ちに) より presto, hacha (斧) より segur, hacha (松明) より antorcha, soler (いつも…する) より acostumar を使い, また de buen talante (進んで) より de buena voluntad を, vergel (植込み) より jardín を, privado (お気に入りの) より favorecido を, pedir (要請する) より demandar を, perro (犬) よりも can ということにしています。

C. 私は can はイスパニア語の単語ではないと承知していますが。

V. いいえ, イスパニア語ですよ。こういうのも, “El can congosto a su amo buelve el rostro”^(註33) とか “Quien bien quiere a Beltrán, bien quiere a su can”^(註34) という諺があるからです。また私は ratón (ねずみ) よりむしろ mur というでしょうが, どちらも等しくカスティリア語でして, これは, “Lo que as de dar al mur, dalo al gato”^(註35) とか, “Al mur que no sabe sino un agujero, presto lo toma el gato”^(註36) のような場合に出てきます。また denostar (ののしる) に代え deshonnar というでしょうが, これは “Casa ospedada, comida y denostada”^(註37)

とか、“Fui a casa de mi vecina y denostéme, vine a mi casa y conhortéme”^(註38) という諺に使われているので私も使っていいと思うのです。私はまた mañana（明日）に代え cras というでしょうが、これは“Oy por mí y cras por ti”^(註39) という諺に力を得てのことです。muro（土塀）と adarve とは同じことなのですが、私は adarve よりむしろ muro をとるでしょうね。

C. 結構ですが、muro は本来のカスティリア語ではないように思いますが。

V. いいえ、カスティリア語ですよ。というのも、“No passa seguro quien corre por el muro”^(註40) のような諺もあるので。さて、言い回しの点ですが、私は次のような手法を使うことにしています。即ち、もし私が“No quiero tener que dar ni que tomar con vos（私はあなたといさかいなどをしたくない）”といわねばならぬとしたら、“no me quiero empachar con vos” とするということです。また“con la que uve mucho placer（それを私はとっても楽しんだ）”といわねばならぬとしたら、“la qual me fue muy agradable” とするということです。同じように、“Mañana me purgo（明日は私は下剤を飲む）”という意味では、私は“mañana tomo medicina” とするということなのです。

M. そこまでにしていただきましょう、お考えの点を私たちが理解するのに十分いやあり余るほどですからね。さて、あなた様が、私共がこれらの事柄に対するあなた様の慎重な態度に感服してしかるべきだと、またお話の中で私たちに対してなされるご配慮にも私共が感謝してしかるべきだとおっしゃっても、ときどき人が日常の話の中で使っているいくつかの短い単語がどんな意味なのかをお話しただかない限り私共は譲歩する積りはありませんね。その単語というのは書き物に使われていることもないし、これまであなた様が口にされたことをも記憶しておりませんし…

V. それは一体どのような語ですか。いくつかを言ってみてください。

M. Aqueste, pues, assí, [no se qué] などですが。

V. あなたはどんな形でその no se qué が使っているのを見たのですか。

M. いろいろな形ですが、私がこれはいいと思ったのはある歌の中での使い方、これはまえに、あなた様に halagueña（快い）と çahareña（人に順れない）とについてお話ししたときに出したものに対しての歌なのですよ。

V. ああ、よく覚えていますよ。ではその歌とかをお聞かせ下さい。

M. La dama boquicerrada,
sorda y muda, no sé qué,
no sé para qué se fué
entre las otras criada.
La necia desamorada
que nada no da ni vende,
tírala dende.

(口を閉じた、つんぽでおしのご淑女は、
 一体何で、何がため、他の女性の間にて
 育てられたか、
 そのわけこれ知らず。そんなに愚かで情の薄い女性なら、
 与えるものも売り出すものも持たぬ故、
 女の間から放り出すべし。)

というのです。

V. 一体あなたどこでそんな歌を覚えてきたのですか。

M. さあね、あなた方イスパニア人の間ですよ。

V. 私そんなもの聞いたことがありませんね。これまであなたがいった二点のもの以外に何か知っていますか。

M. ええ、もうひとつ別のをね。

V. 聞かせて下さいよ。

M. La dama que dama fuere
 de las de dar y tomar,
 solamente con mirar
 ha de matar do quisiere,
 matar y mostrar que muere.
 Si desto no se l'entende,
 tírala dende.

(個性の強い女性にて
 これを淑女の身上ともなす女性なら、
 ただ見やるだけ、己が勝手に
 男を射殺しもせん、男を射殺し、
 男の死せることを示さんともす。

しかるに、もしこの女性がその強き性を認めたがらぬなら、
 女の間から放り出すべし。)

V. 二篇とも私には仲々面白く思えますね。そういった歌を作った人が他にもっと沢山に作っていてくれれば…と願いたいですね。さて、我々の話に戻りますと、no sé qué という言い方はその他の語句とはまったく違った性のものです。なぜこういうかといえ、この no sé qué は実に便利で面白いもので、いろいろな意味をこめたい時によく使われます。これに対し、他の語句は凡夫の“はさみことば”といったところですね。

M. その“はさみことば (bordones)” とは何を指してのことなのですか。

V. 人が話をしていて、どうしてもここにとするような場合に速座に単語が浮んでこないよう

な時、そういった人たちが止むをえず口に出す短いことばやこれに類する他の表現を *bordones* と呼んでいます。ですから、¿*entendéisme*? をすぐに持ち出して、別に理解せねばならぬ大切なこと、あるいはその意味を把握せんとして注意を払う必要のあるようなことでもないのに、何度も何度もこれを話し相手に向かって言う人もいます。ですから、こういう人たちは話しの内容に疑問がありと見て、“自分の言うことが分かったか”と話し相手にたずねているのではなく、彼ら自身の言わんとすることが、こうたずねているうちに浮んでくるようにと願ってのことだというのが皆さん方には分かるでしょう。これと同じ理由で、自分の言がはっきりと理解されたと知っていながら *no sé si m'entendéis* を持ち出してくる人もあります。また、人によっては ¿*estáis conmigo*? ということもあります。これは ¿*entendéisme*? と大体同じ意味です。他に *pues* を使ったり、*tal* を使う人がありますが、話し相手をまったくもってうんざりさせるほどにこれを連発する人もあるのですよ。*aqueste* を使う人も沢山いて、特にこれを必要以上に使う人があるのは問題ですね。これ以外にも *assí* を使って、これを出てくる単語ひとつひとつの後に付けて皆さん方の目の前に突き出してくるような人もいますよ。この他に、*tomé* と *tomamos* を使い、*Tomé y víneme* と *Tomamos y vinimos* とする人もあり、これに対し皆さんが“手に入れた (*tomaron*) もの”^(註41) は何かとたずねたら、おそらくそう言った人たちは、正直いって、その単語はあまり勧められない、きたないはさみことばでしかないと答えることだろうと思いますよ。これらのものに似た表現は外にもあると思いますが、今私は思い付きません。もし他にもっと知りたいとご希望でも、ここはご辛抱下さいね、高くつきますから。

M. 勿論、私たちはもっと沢山知りたいとは思いますが、あまり高価なものでなく、無料のものにしていきたいですね。

V. というのは何がご希望なのですか。

M. 言い方、書き方に関してあなた様のことは、カスティリア語で書いたり話したりする場合にあなた様がその旨として、決まりとしてお守りのことをお話ししていきたいのです。

V. 本当のところを言いますと、私が旨として守っているようなことは沢山はないのですよ、というのは私の行なっている言い方、書き方とは、私にごく自然なものですし、加えて私は何らの気取った言い方をせず話すがままに書くことにしているからです。ただ、私の言わんとすることを正しく意味するような単語を使うよう心掛けていますし、またこれを出来る限り平易に言い表わしてもいます、というのは、私の意見では、どのような国の言語でも気取った言い方はよろしくないと思うからです。文体を高めたり、その調子を抑えたりする点については、私は書くものの内容あるいは誰に宛てて書くかということに応じて、あなた方がラテン語を扱うときに守るのと同じことを旨としているだけなのです。^(註42)

M. この点でもしあなたが誰かに忠告をされるとすれば、どんなことがあるでしょうか。

V. まず最初に言いたいのは、私がこの話の初めに冠詞について話したことを守るようにということでしょうね。というのも、これは書くためだけではなく、正しく話すということにも関係

してくるからなのです。加えて、余計な que をあまり使うなとも言いたいですね。というのも、皆が沢山にこの que を書くものですから、私の考えでは、いくつかの書物では一頁から余計な que を五個、六個と取り除きたくなる程なのですよ。

M. そのお話がはっきりと理解出来るよう何か例を挙げていただけませんか。

V. 諺にはこの余計な que のあるものが浮んでできませんが、これは諺が簡潔に書き表わされているからだと思います。しかし読み物をみますと、Creo que será bien hazer esto といったような文章に今あなた方に話していることが事実あるのが分かるでしょう。つまり、上の文では que は余計なもので、Creo será bien hazer esto という方がずっといいのですから。^(註43)

M. なるほどお話結構ですね。しかし、その que がいつ余計で、いつが余計でないのかを見分けるのにどんな手段があるのでしょうか。

V. よく注意してみると、書き方そのものが、あなた方にそれを教えることになりましょうね。例えば、No os he escrito, esperando de embiar といった場合、余計な、何の意味のない de が出ているので、ここではその de を外し esperando embiar という方がずっとよくなるのです。それにまた、これらの余剰の語の使用は私たちが日常語を書き表わす場合に犯す不注意がもとで生れたのだという私の考えをも忘れないで下さいよ。

M. 私なるほどそうだと思いますし、加えてもうひとつのこともおっしゃった通りで正しいことだと私には思えます。ではお話を進めて下さい。

V. あわせて、私は動詞と lo と la, los と las との組み合わせを自然のままにしておくのがいいと思いますね、自然な組み合わせで使っているのをわざわざ別のいい方をしようなんて考える必要はないのですから。

M. その組み合わせとかはどんなにして作るのですか。

V. hablarlo と traerla, hablarlos と traerlas とかいえば出来上ります。

M. それであなた様は何をいわんとされるのですか、おっしゃる意味が分かりません。

V. つまりこういう場合には私のいうような形を使うべきであって、他の人とは違った言い方をしようとして、ponerlos に代え los poner としたり traerlas に代え las traer などという人のようにつまらぬことに気をやるなということなのですよ^(註44)。実際上は、間違なく両方共使っているのですが、私の考えでは、ponerlos と traerlas という方がもっと簡単で正則であり、まだその上に上品で、カスティリア語らしいのですよ。また、“Me he de perder (私は道に迷ってしまうだろう)”に出てくるように響きが悪くなるような言い方はこれすべてを避けなければなりません。このような言い方よりも He de perderme という方が、皆さんも分かるようによりいい、上品な形式となるのですよ^(註45)。それに、こちらのような言い方をしているのを、もしあなた方気を付けていたら、沢山に目にすると思います。あなた方の考えが二種の解釈を生むような形に書いたり話したりするのは話す人、書く人の側の大きな誤りなのです。

C. 正しくそれと同じことをかのキンティリアノも教えておりますね。 (続く)

(Diálogo de la lengua, Clásicos Castellanos, No. 86 ; págs. 129, 17行-157, 15行).

注

- 1) Cabeça loca, no sofre toca : 「狂った頭は頭布をじっとかぶっておれない」とは、かぶり物をしなければならぬ時に何もかぶっていない人を小馬鹿にしているための表現になる。また、断判力に欠ける者はきまりとか、順序立った考えに従って行動出来ないことを教えた諺にもなる。
- 2) La moça loca por la lista compra la toca : 「狂人娘はしま模様によって頭布を買う」とは、若い女性が無かを思いこんだら、平静にたち返り落ち着いた判断をすることがむづかしいといったものか(？)。
- 3) これは諺ではなく、tocarの持つ三つの意味、つまり「人・物に触れる、さわる」、「頭髪を整える、頭布をかぶせる」、「関係がある」にひっかけて、かなりきわどいことをこの僧侶(fraile)に言わせている場合である。
- 4) 当時のイスパニア国王 Carlos V (1517—1556) はその在位中、フランス国王 Francisco I (1494—1547) と四度も戦うなど仇敵の間柄であった。
- 5) Antonio de Velasco : 当時の騎士で、この種の戯れ歌を作るのに才能のあった人であろう。
- 6) Hierba pace quien lo paga : 「牧草はその草代を払う者が食べる」とは、播いた種は自分で刈れと教えたものか(？)。
- 7) hierba のもつ二つの意味、「牧草」と「毒」とにひっかけていったもの。
- 8) velar は「眠らずにいる・徹夜する」の意味だが、ここでは、prima (朝課) や modorra (明けの課) と動詞 velar とを用いるところに意味形成上矛盾が生じている。おそらく、これらの表現には他に何らかの比喩的な意味があるのだろう。
- 9) Malo es Pasqual, mas nunca le falta mal : 「パスカルは悪い奴だが、彼には悪業が絶えない」とは、悪い人間は次々と悪事を思いつくものだとか教えたものか(？)。
- 10) Uno piensa el bayo y otro el que lo ensilla : 「鹿毛の馬はあることを考え、それに鞍を置く人は別のことを考える」とは、命令する人と命令される立場の人の考え、行動がくいちがうことをもじったもの。但し、この諺を例のビスカヤ人は勝手に解釈し、「一人が馬にかいばをやり、もう一人の別人がそれに鞍をおくもの」との意味にとったのだろう。この間違った解釈をテキスト (pág.134) では simpleza (おろかしさ) と表現している。
- 11) Guárdate de mujer latina y de moça adivina : 「ラテン語を知る女と娘占師には用心して近付くな」とは、見識ばかり高い女性や若くていわくあり気な女性には十分警戒せよと教えた諺。
- 12) A escudero pobre moço adivino : 「貧しい従者には目ざとい下僕を」とは、主人の立場にある人が、あまりむづかしいこと、複雑なことを召使などに言い付けたりすると、求めていたものが得られないことがよくあると教えた諺。
- 13) Al moço malo, ponédle la mesa y mandadlo a mandado : 「性悪の下僕には飯を食わせ、それから使いに出せ」とは、どんな怠け者でも褒美がもらえとなれば、それにつられて一生懸命やるものだと教えた諺。
- 14) Moça, guárdate del mozo cuando le sale el boço : 「娘さんよ、若者にうすひげが生え始めたら、用心してその人を避けよ」とは、文字通り、男の子をいつまでも子供だとばかり思っていてはいけない、特に大人となり始めたら十分用心して接するように、という女性への警句か(？)。
- 15) servidor には「便器」の意味もある。
- 16) La Celestina, Auto I には、「La vista, a quien objeto no se antepone, cansa」とある (La Celestina, Clásicos Castellanos, No. 20, I, pág. 38) 。
- 17) fantasía は opnión (意見), parecer (見解) の意味。cfr. «... para mí no ay igual tormento que no poderme enojar o mostrar enojo por lo que digo o veo que no es según mi fantasía.» (本テキスト, pág. 59)
- 18) これは諺ではなく、「枢機卿はめいめいが法王位をねらう」という単なる例文であろう。
- 19) この diseñar と diseño とは現代語の意味ではなく、determinar (決定する), proyectar (計画する) : designio

(考案・目的)の意味に理解するのが妥当と考えられる。

- 20) solacio (=solaz) ; この solaz は少し前に Valdés 自身がよくない単語として除いたものでもある : «solaz, por plazer o regocijo, no me place» (本テキスト, pág. 122)
- 21) 当時のイスパニアに存在した alumbrados (光明派) と erasmistas とはここに挙げられている異邦人への使徒, San Pablo の書簡集を好んで読んだとされている。この国語問答の著者 Juan de Valdés もこれら改革派に属する一人であった。
- 22) los Chacones. ; 16世紀の言語学者 Pedro Chacón (1526—1581) とその一門を指すのか (?)。
- 23) テキストでは... de las migajas del rey de Portugal となっているが, 当時のポルトガルも世界にまたがる大帝国であったので, その国王の食べ残しのパンくずも, “価値のある, すばらしいもの” と考えられた。これを “立派なもの” の比喩に使ったのであろう。
- 24) テキストでは ansar de Cantipalo (pág. 146) となっている。昔, Segovia 県の Cantimpalo 村にいた, Gansa という名の女の人が, 一人で近隣の村の司祭で Lobo というあだ名のある人と話をしに出掛けたという故事があり, その時以来, わざわざその必要もないのに危険に身を曝す人のことを評し, El ánsar de Cantimpalos, que salía al lobo al camino (カンテンパロのかもは, 道に出て狼の前に姿を見せる) ということになった。
- 25) Honra sin provecho, sortija en el dedo : 「何の得のない名誉は, 指に付けた指輪のようなもの」とは, 利益を得るために名誉を求める人は多いが, 真の名誉は利益を離れたところにあるものだ と教えた諺。
- 26) テキストでは, entre col y col lechuga (pág. 148) となっている。同じものばかりを食べていると美味さも半減するので, 時には変ったものを食べるのもいいことを意味するときなどに使う表現である。
- 27) Con lo que sana el hígado, enferma la bolsa : 「肝臓は治っても, 懐は痛む」とは, 大切なものは努力と金をかけねば入手しえないことを教えたもの。
- 28) Con lo que Pedro sana, Sancho adolece : 「ペドロが治ったもので, サンチョが病気になる」とは, 一方を立てればもう一方が立たずと教えたもの。
- 29) De cada canto hay tres leguas de mal quebranto : 「どんな場所からでも歩くのに困難な3レグアがあるものだ」とは, 何事をなすにも困難な点があるとか, 人それぞれに悩み, 苦しみがあるとかを教えた諺。
- 30) cumplir は中世イスパニア語では, 近代語の convenir (妥当である, 適当である) の意味によく用いられた。
- 31) La pierna en el lecho y la mano en el pecho : 「脚はベッドに, 手は胸に」とは, 損害回復, 復旧のためにはそれに相応しい手段をとれと教えたもの。
- 32) Dos a dos y tres al mohino : 「二人が二人, 三人となって弱い人に当る」とは, 何人かがしめし合わせて, 弱い者いじめなどをすることをいったもの。
- 33) El can congosto, a su amo vuelve el rostro : 「腹を立てた犬はその主人にも顔を向ける」とは, 腹を立てているとき, 人は一番可愛がっている者にさえ, ひどい態度, 仕打をすることがあると教えた諺。
- 34) Quien bien quiere a Beltrán, bien quiere a su amo : 「ベルトランを可愛がる者はその主人をも愛す」とは, ある人に対しいだく好意は, その人の縁者, 関係者にまでも及んでゆくのだと教えた諺。
- 35) Lo que as de dar al mur, dalo al gato : 「ねずみに与えねばならないもの, それを猫に与えよ」とは, どうしてもせねばならぬこと, 避けえないことは重々慎重にことを運ぶべしと教えたもの。
- 36) Al mur que no sabe sino un agujero, presto lo toma el gato : 「ただひとつの穴しか知らないねずみは, すぐに猫がつかまえる」とは, 猫のように敵はどの方向から現われるか分からないので, 事にあたっては逃げ道をいくつか準備しておく必要があることを教えた諺。
- 37) Casa hospedada, comida y denostada : 「泊まれ, 食べられ, その上にののしられた家」とは, 人の好意に忘恩の所業をなす人を叱り, 戒めた諺。
- 38) Fui a casa de un vecino, y afrentéme ; volví a mi casa, y remediéme : 「隣人の家に行って, 恥ずかしい思いをした。しかし自分の家に帰って, それも直った」とは, 人は自分の持っているもので満足すべきであると教えた諺。
- 39) Oy por mí y cras por ti : 「今日は私に, 明日は君に」とは, 今日は人の身, 明日は我が身。
- 40) No passa seguro quien corre por el muro : 「塀の近くを走る者は安全には通れない」とは, 危険な場所を通

ったり、あぶない仕事をする時には、それ相当の覚悟が必要と教えたものか（?）。

- 41) 原文では、«otros se sirven de *tomé y víneme* y de *tomamos y vinimos*, y si les preguntáis qué es lo que *tomaron*, no os podrán dezir con verdad sino que aquel vocablo no sirve sino para un malo y feo arrimo.» (pág. 154) となっている。ここでは間投詞的に用いられた *tomar* に元の動詞の意味、「(手で) とる、(その他いろいろな形で) とる」を与えて、¿Qué es lo que *tomaron*? (手に入れたものは何か) という意地の悪い質問をしている。
- 42) この Juan de Valdés の言は彼の文体に関する考え方として有名である。
- 43) 勿論、近代語では、名詞節を導く *que* の使用は義務的となっていて、Valdés の考えとは逆の解決が下されることになった。なお、例文の *Creo que será bien hazer esto* (これをするのはいいことだろうと思う)、次文の *No os he scritto esperando de embiar* (人をやろうと思って、あなたにはこれまで手紙を書かなかった) は諺ではない。
- 44) Valdés はこのような代名詞弱形の位置をよろしくないものと考えているが、この傾向は17世紀初頭までも続いた。cfr. *No supe más lo que Dios dél hizo ni curé de lo saber* (*La Vida de Lazarillo de Tormes, Clásicos Castellanos*, No 25, pág. 107)。
- 45) 現代語では«*He de perderme*»と«*Me he de perder*»とでは、後者がより口語的形式と見做される。